

天に上げられ、神の右の座につかれた

マルコによる福音 16:15-20

（そのとき、イエスは十一人の弟子に現れて、）言われた。「全世界に行つて、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。信じて洗礼を受ける者は救われるが、信じない者は滅びの宣告を受ける。信じる者には次のようなしるしが伴う。彼らはわたしの名によって悪霊を追い出し、新しい言葉を語る。手で蛇をつかみ、また、毒を飲んででも決して害を受けず、病人に手を置けば治る。」

主イエスは、弟子たちに話した後、天に上げられ、神の右の座に着かれた。一方、弟子たちは出かけて行って、至るところで宣教した。主は彼らと共に働き、彼らの語る言葉が真実であることを、それに伴うしるしによってはっきりとお示しになった。

説教

きょうの聖書テキストはマルコ福音書の成立時にはなかった文章（追加文）だということで聖書学者は概ね一致しています。つまりマルコ福音書は16章8節で終わり、9節から20節にかけては後世に追加された文章だ、ということです。古い写本は8節で終わっているけれど新しい写本には以降の追加分があるということがその根拠です。（*注一）また、その追加文には長い結びと短い結びの二種類があります。教会では伝統的に長い結びを採用していて、きょうの朗読も長い結び（9節から始まる）の後半部分です。

朗読しなかった短い結びの方はこうです。

◇結び 二

〔婦人たちは、命じられたことをすべてペトロとその仲間たちに手短かに伝えた。その後、イエス御自身も、東から西まで、彼らを通して、永遠の救いに関する聖なる朽ちることのない福音を広められた。アーメン。〕

今の時代では長いほうが古くて、短いほうが新しい、長いのはかったるいから、短く簡潔に新しくするとなりますが、古い時代の文書はたいてい短いほうが古くて、長いほうが新しいという法則があります。聖書学者たちも追加分とされているマルコ 16 章 9 節以下は短いほうが古い（2 世紀には出回っていたよっだ）と推定しています。追加部分はイエスの宣教命令と解釈すれば、短いほうも長いほうも同じ内容「世界中に宣教せよ」といっています。（*注二）

それから、イエスは言われた。「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。信じて洗礼を受ける者は救われるが、信じない者は滅びの宣告を受ける。」

16:15-16

この 15 節の「すべての造られたもの」とは人間のことを差しています、世界中の人に福音を宣教しなさい、そして信じて洗礼を受けたものは救われて、信じないものは滅びの宣告、つまり滅ぶとイエスは言われたのだということです。すぐ滅びるのではなく福音を宣教されて信じないと滅びるということです。（*注三）

図式的に言えば「**福音を伝える⇒福音を信じる⇒洗礼を受ける⇒救われる**」となります。

ところで、教会にはとくにプロテスタントでは「あかし」があります。信じたものがなぜ信じるにいたったのかということを発表することを「あかし」と呼んでいます。あかしを人前ですると一人前と認められるわけです。でもこれもけっこう形式的になってしまい、わたしもいろいろ聴いたことはあるのですがしらけることも少なくはありません。それでもわたしはイエスにあった、イエスを見たというはなしに感動します。

でも、これはおかしい話なんですよ、イエスは復活して 40 日間、地上に現れ、そして天に上られ神の右に座しておられるわけですから、今、地上に生

きている、地上を旅するわたしたちは会うことはできないし、見ることもできないはずなんです。

16:19 主イエスは、弟子たちに話した後、天に上げられ、神の右の座に着かれた。

それでもあかしをする人はイエスを見たのだろうし、そのイエスに諭され励まされて絶望の淵から戻り、今を生きているからあかしできるのです。

で、お前はどうかなのよ、と聞かれても困るんです。わたしはどうにもうまく「あかし」することができません。それでも毎週説教する、これって無責任のような気もしますが、いまのところ雷に打たれもせず、結構元気に暮らしているので大目にみてもらっているのかもしれない。

イエスのことば、イエスの行い（奇跡だけでなく、イエスの復活、昇天もふくめて）福音とはこの二つにあるのでしょうか。

*注一：マルコ福音書が最初に書かれたときには、空の墓でおわっていて、イエスの復活、昇天、聖霊降臨などは福音書としてはまとまっていなかったということの意味しています。

*注二：追加文が旧いだの新しいだの説明しましたが、両方とも福音書成立当時にはなかったという事実は厳然としてあります。だから追加の部分は無視すべきだという結論にはならないというところがキリスト教のキリスト教たるゆえんでもあります。

*注三：これにもいろいろ解釈があって福音を宣教される、する側ではなくて受ける側、ほうに問題があって信じることができないのではなく、宣教する側に問題があって信じるに至らないこともある、という言い訳というか弁明もあります。